＜同志社人が誇りに思える情報＞
同志社ファン・レポート
Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report Doshisha fan report
発信：同志社ファンを増やす会

第３０２号　・2021 年 03 月 01 日発信

新著『同志社を掘る』を語る（２）

本井康博氏（同志社大学神学部・元教授）

■（前号の）はじめに

過日、「同志社ファンを増やす会」の多田直彦氏から、「同志社ファン・レポート」が３００号を迎えるので、記念に「同志社人が誇りに思える情報」を投稿いただきたい、とのメールが届きました。そこで、新著『同志社を掘る---創立１５０年に向けて----』をご紹介することが、適切と考え、３回にわたって連載することになりました。

＊　＊　＊　＊

前号は「概論と目次」でしたが、それに続いて各論に入ります。今号はⅠ章からⅤ章についての内容紹介です。

Ⅰ章　創立秘話　Ⅱ章　佛教界との軋轢　Ⅲ章　ミッションとの抗争
Ⅳ章　潰えた学校　Ⅴ章　校舎と施設

Ⅰ章　創立秘話

ここでは、明治維新の三傑（西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允）や勝海舟らと新島襄・同志社との知られざる交流を取り上げ、新島や同志社を日本近代史の潮流に正当に位置づけることを試みました。実はこの分野での新島襄の交流の消息は、すでに『新島襄の交遊--維新の元勲・先覚者たち----』（２００５年）で早くに紹介しております。

同書の内容を具体的に言いますと、三傑以外にも勝海舟、伊藤博文、板垣退助、陸奥宗光、大隈重信、井上馨、福沢諭吉、森有礼といった錚々たる人物との交わりをそれぞれ個別に究明しています。福沢と大隈を除き、一私学の創立者でこれほどの人脈をもった人物は他には

いません。新島（同志社、キリスト教）の視点から日本近代史を叙述すれば、立派な「裏面史」が出来上がります。

ただ同書では渋沢栄一を落としていたことが、今となっては惜しまれます。今月（2021年２月）からスタートしたＮＨＫ大河ドラマ「青天を衝け」の主役ですし、２０２５年には新１万円札の顔になります。ドラマではスルーされると思いますが、新島や同志社との関連はけっして浅くはありません。材料はすでに集めておりますので、いずれ雑誌か拙著で発表します。

そこで、維新の三傑ですが、いずれの寓居も「新島旧邸」に近い所にあったことから窺えるように、新島や同志社との距離は意外に近いのです。とりわけ、ほとんど知られていないサプライズですが、西郷にしろ大久保にしろ、息子や孫が同志社に入学しております。

木戸は三傑の中でも突出して新島の支援者となり、大阪、ついで京都での開校に尽力してくれました。同志社の開校は、「木戸ワールド」内部での出来事でした。その意味では、彼は山本覚馬と並ぶ影の功労者です。同志社ではいま少し、彼に光をあてるべきです。

■勝海舟と新島襄

維新の三傑に限りなく近い存在が、勝海舟です。海舟と新島ですぐに思い浮かぶのは、新島の墓碑銘です。しかし、本書はふたりが会談した際の発言に着目してみました。例の「同志社の完成は２００年」発言です。この新島発言は、広く人口に膾炙しています。いや、「常識」化され過ぎて、かえって問題です。ほんとに「２００年か」の謎が残るからです。

この謎は私以外、あまり分析されたことはありません。しかし、物的証拠に従う限り、真相は限りなく「３００年」に近いのです。そうであれば、百年の差は結構大きいと思います。たとえば、４年後に迎える創立１５０年は、「２００年説」ではゴールが近い地点になりますが、「３００年説」では折り返し点にほかなりません。

真相解明という点では、同志社女子部の開校もそうです。まず女子中高と女子大とでは、創立記念の年月日が食い違うというのが、部外者には奇異なのですが、それ以外にも記念日に関しても２桁の候補があります。はたしてどれを事実と認定すべきか、逐一検討してみました。私案も出しておきました。

それ以上に女子部の歴史で問題視すべきは、創立者です。同志社だから新島襄。これはいけません。そもそもの始まりは、Ａ・Ｊ・スタークウェザーです。ですが、彼女では「誰？」の世界ですから、当事者も腰を引いてしまいます。けれども、どう見ても「同女」は独身女性宣教師が創った学校から始まっています。新島はそれを同志社に引き取って、自ら校長になりました。それ以前の女子塾は、同志社から独立した組織でした。これは、学内的にも極めてマイナーな見解ですから、その理由を詳しく述べました。

同志社創立に関する最後の「秘話」は、新島の立場、身分です。常識的には同志社の「校長」です。ですが、「牧師」（宣教師）としての側面（実は半身）を見落としてはなりません。同志社は、校長としての給与を１円も払ったことはありません。給与はすべてボストンのミッション本部から来ました。牧師（宣教師）が創った学校という視点で見なければいけないのが、同志社です。学校の創立、経営にあたって校長と牧師ではどう違うのか、その差を究明することも大事です。

Ⅱ章　佛教界との軋轢

明治維新の三傑に続き、Ⅱ章とⅢ章では、初期同志社が蒙った内憂外患に話題を転じます。同志社の「外患」に関してはⅡ章「佛教界との軋轢」で、そして「内患」はⅢ章「ミッションとの抗争」で扱いました。とくにⅡ章では、これまであまり分析されてこなかった同志社に対する京都仏教界の動向をつぶさに検討しました。

■佛教勢力との抗争

伝統宗教の一大拠点、したがってキリスト教の反対勢力が、よりによって最強の古都・京都にキリスト教学校を開くというのは、誰が考えても「無謀」というものです。Ｄ・Ｗ・ラーネッドなどは、「琵琶湖を比叡山で埋めるようなもの」、「人が空を飛ぶようなもの」と形容しております。新島はそれを覚悟して男気から敢えてチャレンジしたわけでもありません。ではなぜか？京都立地はそれ自体が、興味ある同志社史の課題です。

京都における僧侶や有力信徒、あるいは神官の眠りを覚まし、慌てさせたのは「伝統宗教の首府」とも言うべき京都に「陳入」した同志社です。嫌がらせ、デモ、口論、暴力などによる排斥から、ついには演説、討論による排斥へと進展します。新島はこれを「宗教戦争」と呼んでいます。

本書の成果のひとつは、演説合戦ともいうべき弁論上の抗争を当時の新聞記事などを駆使して明らかにしたことです。具体的に言えば、同志社（キリスト教）演説会ＶＳ仏教系排耶演説会の衝突です。日時や場所を特定したうえで、分かる限り双方の毎回の出演者や題目を挙げました。

演説会はしだいに暴力事件を生むまでに白熱化します。これに慌てたのが時の政府で、イギリスを始めキリスト教国との条約改正交渉に取り組んでいたさなかでもあったので、同志社の肩を持ち、一方の佛教勢力を鎮圧し始めます。同志社の演説活動が、政府の外交姿勢に意図せぬ感化を及ぼした珍しいケースです。

Ⅲ章　ミッションとの抗争

以上の「外患」に続いて、次にⅢ章「ミッションとの抗争」では「内憂」の典型としてミッション（同志社の場合は、アメリカン・ボード）との対立に注目しました。

ミッションは常時、同志社の篤き支援団体だったわけではなく、時には同志社を敵視する宣教師が反同志社的言動に走り、新島を悩ませたことを実証します。ラーネッドも『回想録』で証言しています。「ミッションの内には同志社に反対する者が多数あって、新島先生を助ける人はデイヴィスさん一人」というのは、さすがに「大なる間違い」であるが、けれども、大阪や神戸の宣教師の中には、反対者がいたことは事実で、同志社を神戸や大阪に移すべきだと力説しております。いったい、その理由は何か？

さらに、ミッションと同志社の関係は、時には学園首脳の人事にも影響します。同志社チャペルの壁に掛けられている初代から 8 代までの社長・総長の肖像画には、非卒業生がふたりだけ混じっています。西原清東（4 代）と片岡健吉（5 代）です。とりわけ、片岡は信徒ではありますが、長老派系です。これは異色の人事というべきです。

しかも、時の首相、大隈重信あたりの仲介がありました。外部の勢力で同志社総長（当時は社長）が決定するという異例の人事です。この謎を解くためにも、同志社とミッションとの対立という局面を知る必要があります。

Ⅳ章「潰えた学校」

ここでは、消失した学校として同志社仙台分校、京都看病婦学校、同志社政法学校を取り上げました。新島の在世中、全国各地に同志社の姉妹校は何校か存在しましたが、分校は同志社分校女紅場（後の同志社女学校）以外、仙台だけです。分校ですから本校（京都）校長の新島が校長を兼ねます。

もしも仙台分校が今も続いていたら、東北地方や北日本における同志社の知名度や評価は、相当に上がっていたはずです。創立の由来と廃校の理由を詳しく論じました。

惜しいのは、京都における病院（同志社病院）と看護学校（京都看病婦学校）の閉鎖です。新島が医学部設立構想の一端として発足させたものですが、新島の死後、廃止されました。近年、同志社女子大学が看護学部や薬学部を発足させましたので、医学部も夢ではなくなってきました。新島の医学部構想が改めて注目される日が、やがて来るものと思われます。

同志社政法学校は、大学レベルの法学部の誕生としては、きわめて早いケースですが、残念ながら頓挫してしまいました。

Ｖ章　校舎と施設

ここでは、今は亡き建物、ならびに同志社墓地（若王子山）を取り上げました。建物としては、中井屋敷、三十番教室（最初の神学館に相当）、第二寮、フレンドピースハウス（旧ハワイ寮）などです。中井屋敷は英学校最初の仮校舎（寺町キャンパス）で、翌年、英学校が薩摩藩邸跡地に移転すると、新島が個人的にその敷地を購入し、自宅（現新島旧邸）を竣工させました。すなわち、寺町キャンパスは同志社にとって発祥の地であると同時に、新島家の生活拠点でもありました。

旧ハワイ寮（梨木キャンパス）は、アーモスト寮と並ぶ異色の学生寮で、建物が国の登録有形文化財に指定されていました。にもかかわらず、今回、解体され、同志社幼稚園の新園舎にとって代わられました。新園舎の館名を依頼されましたので、私は「シャロームハウス」と命名いたしました。「シャローム」こそ、旧「フレンドピースハウス」の精神的再興に最適の名前と確信したからです。

建物解体という点では、到遠館も同様で、W・ヴォーリズ設計の国の登録有形文化財が取り壊されました。現在、全面的な建て替え工事が進められています。建築家として人気のあるヴォーリズについても、同志社建築史の流れの中での位置や特徴について論じました。彼は五棟のレンガ造りの重要文化財建造物に続く時代の校舎を数棟、校内に建てました。最近、烏丸通りに面して威容を誇る寒梅館のファサードは、彼がかつて設計した啓明館（二代目図書館）のファサードをモデルとしていますので、ちょっとしたヴォーリズ・リヴァイバルです。

ヴォーリズの後を継ぐような形で校舎設計（ただし女子部）を受けもったのが、京大の武田五一教授で、栄光館、静和館、ジェームズ館の３棟を設計いたしました。３棟がシンメトリックに均衡を保つ景観は、女子部の品格を表している感がありましたが、静和館がいまの新館に建て替えられたのは、建築史的には残念なことです。静和館も登録有形文化財でした。ちなみに、重要文化財と違って登録有形文化財の処分は、所有者が自由にできると聞いておりますが、歴史的な建物がキャンパスから消去されるのは、なんとも惜しいことです。

その点、同志社墓地は、新島襄の埋葬以後、閉鎖されずに連綿として続いているのが、幸いなことです。ですが、墓地の成り立ちや経緯、さらには不明の埋葬者等に関して、これまで謎が残されていました。そこで本書では墓地の成り立ちから現状（全貌）までを紹介した上で、墓地全体のマップを作成し、これまで不明であった者を含めて、すべての墓の埋葬者名を解明しました。

葬式の前日まで、南禅寺天授庵に葬られることになっていた新島襄が、突然、山の上に埋葬されたのはなぜか。その要因を始め、勝海舟による新島碑銘の「誤字」など、謎の究明に取り組みましたので、思わぬ発見があると思います。